

海のシルクロードと仏教

(仏教とその基盤)

高 橋 堯 昭

仏教は通商路沿いに栄えた。これは大唐西域記や現存するインド西南部の窠院が、昔の通商路沿いに存在し、又そこに残された寄附者の銘文からみて、商人長者の基盤に立っていたことが推量されよう。私は仏教学会報や棲神で再三とりあげてみた。

即ち、大唐西域記に見られるように、七世紀初頭に仏教の残っていた所は、ナーランダの仏教大学を除いては、西インドの、所謂ガンダーラ地方と、東南インド、所謂アマラパティ、ナガールジュニコングのあるクリシュナ、ゴダバリー河辺と西インドのボンベイ、ブローチ、カリカット方面である。これは後述の如く、ローマ、アラビヤを主とする海外通商の栄えた所であることはいうまでもない。ガンダーラは陸のシルクロードの接点であり、あとの二つは、私のいう海のシルクロードの寄港地である。これらの地に仏教が現存していたにも拘らず、中原地方はひしひしとヒンズー化が進んでいたことが西域記からうかがわれる。要するに仏教は普遍を求めて成立し、従って、普遍の基盤を求め行ったといえよう。

これは通商という普遍的世界が、仏教の普遍性の理念と一致するとも言えようし、逆に、M・ウェーバの言う「イ

インドには農村はあるが都市がない」という「閉ざされた世界」のインドに於ては、仏教よりヒンズー教の方が適切であつたらう。

だから、仏教は先述の如く、通商路沿いの「線」としての世界にひろがって行き、「巾」としての世界には生き得られなかった。更に仏教の擔い手は純粹のインド人というよりも、むしろ塞外人、所謂サカ、バルタイ、バクトリヤ等の商人長者に擔われていたと言つても言いすぎでない。例えば、サンチーや西南海岸の洞窟寺院の銘文に、いかにヤバーナが多いか。又ナガールジュナコンダの仏教の隆盛に大きな寄与をなしたイクシュヴァーク朝は、実はウジャニーの仏教隆盛に寄与したサカ王朝と姻戚関係、即ちウジャニー王の妹がここに嫁して仏教の最大の寄与者となつた一事をもつてしても、仏教の基盤がどこにあるかが分らう。民族種族を超えた商人長者の普遍性が、仏教の普遍性と合一するのである。

私はこの普遍を求めて、広がり行く仏教が、更に東へのびて行く、その道程にあるスマトラのバレンバン即ちシュリヴィジャヤのサイレントラ王朝の仏教を、この通商路の上に於て考へて行きたい。然し、この時代の現存物はジャワ、ポロブドゥールしかないから、これを主たる手がかりとして考へて行きたい。

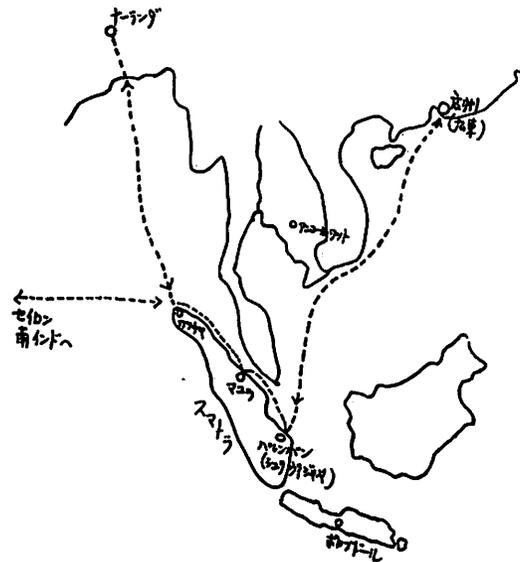


私の俗にいう海のシルクロード、即ち支那からギリシャ、ローマへの航路は相当古くから開發されていた。従つてインド人も相当早くから東西の國々に関心をもつていた。

即ち、記録によると、プトレミーの「Jabatiee は金の島で、非常に豊沃で多くの金を産す。」とあるから紀元前後「ジャバが平行で、豊沃樂土」であることをインド人は知つていた。そして、この航路にのつて、「大奏即ちローマの

マルクス、アウレリウス、アントニウス皇帝の使者が支那に來ている」(後漢書)のである。

この通商の航路は、最初は海岸沿いの航路であつたろうが、その中、季節風を利用する方法を發見した。まづ、④インドから紅海へ行く道は、冬季は水吹流がインド半島の先から、アフリカのケニヤの方へ向つている。やがて春から北に向うからメルシャ湾口に達する。従つて、春のメッカの祭りに巡礼する団体はこれを利用してメッカに向うが

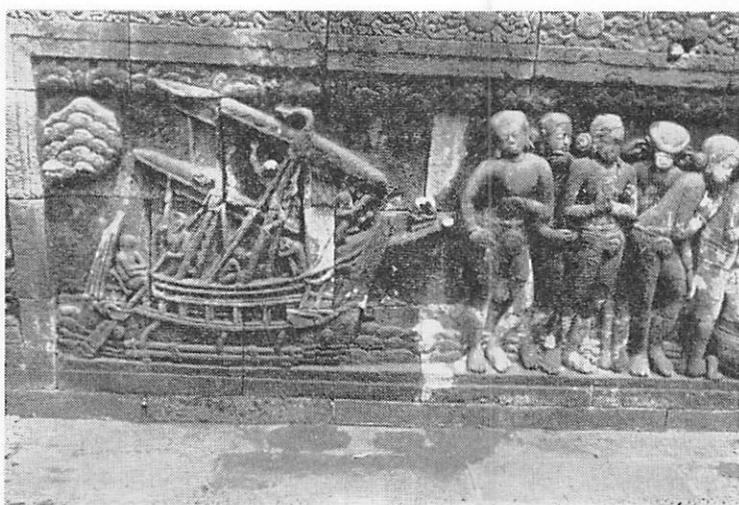


祭りの終る頃に、水吹流は逆になり、所謂モンスーン海流のつてインドに帰る航路が利用されて來た。⑤ベンガル湾もインド大陸北部が冬になると冷えて高氣圧になり、南海が高温で低氣圧になる為北東風が吹く。丁度セイロンの北部、アヌルダブラ等インド本土とは逆に、冬に雨期となる理由である。夏は逆風となる。⑥この典型的なのが、パレンバン即ちシュリヴィジャヤと広州、今の広東との間である。冬になると、支那大陸に強力な高氣圧が出来る。我々のいう西高東低の冬型氣圧配置だ。この高氣圧からスマトラの氣温の熱い低氣圧に向つて季節風が強く吹く、ここで風待ちをしていた商船が一斉に南下する。十四世紀のイブンバトータの記録の「冬になると広州の港に一隻も居

なくなる」理由である。夏は逆風が吹き、バレンバンから真直ぐ北上する。この一番の難所が風のないマラッカ海峡なのだ。法頭の仏国記に「二百人乗りの大船で出発、その船は海難に應じる為に小船を引いている。東へ二日航行して風に会い、船に水が入り出す。小船に避難しようとするが、沢山の人が来て沈没するのを恐れて、小船は引綱を切つて了う。商人は船荷を海中に捨て、沈没させぬようにする。法頭も一心に観音を念じ、風は十三昼夜続いて、やつと島の辺かたに来る。この辺は海賊多く、つかまれば必ず殺される……」と。又マルコポーロも五ヶ月の風待ちの間に、城きやうを作つて警戒をした等、大きな危険をかけて航海したのである。

更に、その当時の船団規模を知る為、少し長いがマルコポーロや、イブンバトータのこれに關した部分を写してみる。マルコポーロは「大汗の用意させた船は十四隻、いづれも四本マストで十二の帆を張ることが出来、この中には二百五十人乃至二百六十人の水夫の乗り組める四五隻もあった。船には大汗の命で二年分の糧食が積みこまれた。一行は海に出ると南ジャワという島につくまで約三ヶ月の航海をつづけ、この島をはなれて目的地につくまで十八ヶ月一行はインドの海を横切つて進んだ。出帆した時、水夫を除いて六百人は確実に乗りこんだのに最後に生きのこつたのは十八人であった。……」又イブンバトータも次の記録を残している。「私達の滞在していたカリカット（インド西側南端）には十三隻のシナ船が来ていた。大船は一千名の乗員（水夫六百人戦士四百人）、各船は「半分」「三分の一」「四分の一」の三隻の小型船が従う……」と。このように見ると、イブンバトータから千年前の法頭当時の様子に似ているから、大体このような規模の船団が多く、難波船を出しながら航海したことが推測される。又このことは義浄の大唐西域求法高僧伝からみても分らう。





然らば、これらの船がどのようなものであったか、これを出土した彫刻絵画から考えてみる。大体私の今まで見て来た彫刻絵画の船としては、

- 1、サンチーのストゥーバの浮彫りの船（前一世紀）
- 2、インド、コマンデル海岸発見のアンドラコインの船（後二世紀）

3、ジャワ、ポロブドールの仏塔の船（後八世紀）

4、アジャヤタラの壁画の船（後五世紀）

5、アンコールワットの浮彫りの軍船（十三世紀）

6、コナラックの浮彫り（十二世紀）

で、この中で遠洋に適し、前記法顕、マルコポーロ等の資料に合うものは、このポロブドールのものであろう。そしてこのような船によって、インドの文化が移し植えられたのである。そしてその基地は、スマトラのパレンバン、セイロン、インドのカリカット、ブローチ等が有名であったが、その外最近の研究ではルラー、アラマギルブール等の約百ヶ所に前二世紀から後七世紀にわたる海上交易に関する遺跡をインド考古局で発見

しているから、この海上交易の發達のさまが推量されよう。



更に仏典にも、海外交易を示したものが多く、私はジャータカに限って、この問題を考えてみたい。そもそもジャータカとは仏の前世物語で、もともとは印度の民話寓話であったのだが、仏の偉大さを表わすため仏教聖典として奇蹟物語（未曾有法）、譬喩、因縁、過去と現在を結ぶ話の原因を説明する話が出来た。その經典としてはパーリー中部一・二三、漢訳中阿含三十二、未曾有法経が出来た。この話の中、仏の前世物語に限定されたものがジャータカという。この前世物語が一番早く彫刻に現れたのがパールフットの彫刻で大体アソカ王の直後、前三世紀の終りから前一世紀までに作られているから、經典としての成立はそれ以前のものといえよう。然もこのジャータカの主題は「菩薩が前世に○○であったとき……」と、菩薩という言葉が使用されている。この菩薩という言葉について私は棲神四十号にとりあげたように、鹿野園出土の釈迦菩薩像に書かれている。即ち「ボデーサットバの像をカニシカ王の三年（後一三〇年）に建立」とあるから、これを下限としてこれ以前のものと考えていい。又これは漢訳経史上からも言えるから、このジャータカに入れられた物語りは大体後一世紀から前三世紀後半までの社会の反映とみてよいと思う。故に、このジャータカに現れた海外交易を考えて見るのも興味あることと思う。南伝大蔵経小部經典からこれを拾ってみると。

四十一、ローサカ長老本生

「船は海上を一週間航行して、七日目に海の中中で難破……竹の筏にのって海上の水晶宮で四天女に会う」

一九〇 戒徳利益本生物語

「仏弟子が一人の富裕なる理髮人と同乗、七日目大海の真中で難破した。……船は七宝で満たされ、三本の櫓は青玉……。」

一九六 雲馬本生物語、

「錫蘭島にシリサバアトウという夜叉の町、夜叉女から五百の商人が天馬にのって救わる。」

三五三 張枝本生物語

「海上で難破船に逢った人のように……」

三六〇 スッソन्दイー妃本生物語

「バルーカッチャの船にのって、スヴァアンナプーミ（金地国スマトラ）に行った。」

「摩竭魚が船をこわし、サガは枝の上に臥し風にまかせて行き、龍島なる金翅鳥の棲所の尼拘律樹の側についた。」

四六六 海商本生物語

「大きな船を組立てて、……大海にのり出し、風のまにまに漂いながら、大海の真中にある島に辿りついた。ところが、自然に生えた米、甘蔗、芭蕉、菴羅、閻浄波羅蜜、椰子……種々の果物があつた。」

五三九 マハジャナカ本生

「お母様、私はスヴァアンナプーミ（金地国）へ行ってまいります。」「海は成功が少なく危険の多いものです、行つてはなりません。」……「七日間、船は七百由旬を走つたが、余りひどくはしつて、大海の真中で船は正に沈没しはじめた。」

その他、これらと同じような話の商主シンハ王本生、亀本生、ミッタヴィンダ本生等があるが、ここにたまたま、

金地園めざした話が二話あるから、この経典成立当時のスマトラ、ジャワとの交渉を物語っているといえる。又特に興味深いのは、三八四、法幢本生(グンマツグジャータカ)に「迦戸園に住んでいた或る商人が方角を知らせる鴉を一羽捕えて船にのせ、俱に航海に出て行った……。」このような方角を知らせる鳥をのせて航海するのは旧約聖書の冒頭に出て来るノアの箱船の中の有名な話で、西アジア的なものである。

これをもってしても、東西通商による文化交流の行なわれたことを物語っている。

このようなジャータカ中の話も、ほとんど難破するのは如何に当時の航海がむづかしかつたかを推測するに十分である。

これは大唐西域求法高僧伝の六十人の僧中多くが、航海の中に沈み、むしろ法顕、玄奘、義浄の如きはほとんど奇蹟の生還とみてよい。

かくの如き危険をおかして、危険が多ければ多い程、その利益は莫大であった。このさまがジャータカににじみ出ている。この通商のつて文化が西へ東へ交流されて行った。

更に私はこの各地に散在出土する支那の陶磁器の分布状況、又時代区分からも、その時代時代の通商の多寡を推測しようと思うが、これはこの次に譲りたい。



然らば、古文書資料から、このジャバ、スマトラと特にバレンバンたるシュリヴィジャヤと支那との関係を見よう。

(1)後漢書卷六帝紀卷一一六、南蛮列伝(西紀後一三一年)に「後漢の順帝、永建六年、葉調(ジャバ島西端)なる王

便なる者が師会という使臣を支那の朝廷へ貢獻す。師会は漢に帰属する葉調王の邑君に任ぜらる。そして金印と綬をうく。

(2) 新唐書下、南蛮伝(後六七〇—六七三)に来貢の記録あり。

(3) 新唐書(三三下地理誌)

「五日の行にして海峡に至る。蕃人は之を質(海峡)という。南北百里、北岸は即ち羅越国。(ジョホール州の南端平城天王の第三王子真如親王薨去の地)南岸は即ち仏逝国なり。仏逝国の東は水行四、五日にして阿陵国に至る。南中州の最大なるものである。又西は峽を出でて三日にして葛々僧祇国に至る。

(4) 義浄の南海寄帰内法伝の記事(後述)

(5) 義浄の大唐西域求法高僧伝卷下、無行禪師の条、「広州より東風に船を浮べて一月にして仏逝国に至る。国王厚く礼し、特に常倫と異なる。後に王の船に乗じて十五日をへて、未羅瑜州(スマトラ中部ジャムビ地方)に達し、又十五日にして羯荼国(ケータ、マライ半島西海岸赤土国)に至る。冬末に至り、船を転じて西行して三十日を経て、那迦鉢檀那に至る。ここより海に浮ぶこと二日にして師子国に至り仏牙を觀礼す」と当時の地図がうかがわれる。

(6) 宋史四八九卷

「後九七年広州に交易の役所が設置。」

(7) 宋史四九八卷真宗の咸平六年(後一〇〇三年)、三仏齊の思離味囉無尼仏麻調華王は二人の使節を支那に送る。正使李加排、副使無随李南悲は王の長寿を祈って一寺を建てた。その寺号と鐘を求めたので支那より、承天万寿の銘と鐘が与えられた。

(8) 真末の大中祥符元年(後一〇〇八年) 思離麻囉皮王の使、来貢

(9) 宋史四八九卷その他の文献から、シュリヴィジャヤが

神宗の元豊年間(後一〇七八—八五年)

元豊二年、五年、六年

哲宗の紹聖年間(一〇九四—九七)

高宗 紹興二十六年(後一一五六)

孝宗 乾道八年(後一一七二年) に来貢したが、然し淳熙五年來貢を禁じた。

このように、シュリヴィジャヤを中心として、この地方から支那への交流が盛んであったが、やがて変化が出て来る。それは、周去非の嶺外代答卷二(後一一七八年) に来貢の諸国の名が出ているが、その中で、1、大食(アラビヤ) 2、閩婆 3、三仏斉と順位が変わっていることが注意される。これはシュリヴィジャヤよりジャバの力が大きくなって来ていることを示す。更に特筆すべきは明誌卷三二四卷(一三六八—一六四三) に三仏斉について、「時爪哇已破三仏斉、抛改其名曰旧港、三仏斉遂亡」とあり、又十四世紀の旅行者の記録もなくなる。即ちここに通商がたえなことが示される。



次にインドとの交渉の記録をたどってみる。

1、ラマヤーナ(後二世紀) にヤバドウイバをさがしたところ、七王国をもって飾られし金銀の島にして……」と記されている。

2、梁高僧伝卷三、(大正蔵五十卷三四〇頁) 罽賓国(カシミール)の求那跋摩(三六七―四三一)が闍婆王を教化してしたが、宋の文帝、元嘉元年(後四二四年)に使いを闍婆王婆多加に送り、招待す、求那跋摩竺難提の船で広州へ行く。

3、アールヤバタ(後四九九年)という印度の有名な天文学者はその著アルバーティヤムの中で「太陽がセイロンをのぼる時、祝福された島は日没で、ヤバの端では正午であり、ローマの境では真夜中」とあるから、ジャバは最早ヤインド人にとって自明のものとなっていた。

4、バタビヤを貫流するチ、リウン川の支流、チ、アルタ川の上流デサ、チャンベアの河床に「西ジャワに後五世紀タルマ国というインド王がインド系の王国を作った」という彫文出土。

5、南ボルネオのクテイ領サマリンドグ附近から、五世紀の日附のあるサンスクリットの碑文が出土され「土地の支配者がパラモン教に領地を与う」と記されていた。

6、バレンパン近郊のフキット、セグンタングより仏の胴体が出土し、クロム博士はアマラバーティ派の影響でシユリヴィジャヤ以前と断定している。これと共にムシ河から等身の観音像が出土、その様式からみて、後七世紀のパラバ王国の芸術様式故、南インドとの深い関係が示されている。

7、インドナーランダ刻文(後八五〇―八六〇)

「サイレンドラ王朝のバラブトラ・デーバの依頼でナーランダに仏教精舎が建てられ、パーラ王朝の三代デーバパーラ王が精舎へ数村を寄附され、この刻文が建てられた。」

8、ライデス大板金

「マラーラヴィジャヨットウン、ガウルマン王によって建立された。王はサイレンドラ王統に属し、シュリヴィジャヤの支配者であるカタールハを支配し、チューラマニヴィルマンの子で、この精舎の所在地は南インドの東岸、ネガバタム (Negapatam) にして、マラーラヴィジャヨットウン、ガウルマン王が父のチューラマンヴィルマンの名をとって名付け、アーナイマンガラム (Anaimangalam) 村をこれに寄附した。はじめ父王のラージャラージャ一世の二十一年 (後一〇〇六年) 頃に建立がはじめられ一村を寄附、その死後子の王によって継承された。」

とインドの中に二ヶ所も精舎が建立され、然もインドの王がこれに村々を寄附する程インドとの関係は深く、又仏教も盛んであったことが分ろう。然もインド以上に仏教が盛んであったことは

9、ナールランダの主僧アティーシャ (十一世紀) がこの地を学習のために訪れ、法称の下に学んでいる事実である。

その後、チョーラ國が

10、一〇二五年にシュリヴィジャヤに海軍の遠征隊を送り勝利を得たと記されているが、後一〇七〇—一一一九年に兩國が復交通商する。

11、マゲラン碑文ムルチラン南方の 'Trianga' 出土 (サカ紀元六五七 AD 七三三) に「南印から来てジャワを支配するに至った」ことが示されている。

12、スマトラ Baros 附近の Lohu Tua からタミール語で書いた後一〇八八年に当る日附のある碑文やパタンラワスの精舎より南インド系の菩薩像出土

13、その他、タンジョール刻文 (後一〇三〇—一三二一)

マラー寺刻文 (後一〇二四—一二五)

以上によって推測されるように、南インドの文化がここに流出して行ったことが分る。特に干潟教授はこのように南インドから多くのものが、スマトラジャバ方面に移ったのはカーチプランを中心とするバラヴァ王国の興亡と深い関係があると指摘しているが、いわばインドの延長として、これらの地域は密接の關係をもっていたことが分らう。この中心は勿論シュリヴィジャヤである。



然らば、この地に仏教は如何なる形にあつたのであろうか、又これは一体何年頃から何年頃までであらうか、法顯が四一四年セイロンから支那へ帰る路に、耶婆提による、然し外道バラモン盛んにして仏法言うに足らずといっているが、然しこれと矛盾する資料として

2、前述の求那跋摩がここにおいて四二四年に支那から招待されて広州へ行ったことから仏教は最早や現存していたとも考えられる。即ち先述の南インドからの移住者によって最早や現存していたと考えられる。

3、宋書卷九七、劉宋の元嘉十二年（四三五年）に支那に朝貢したその上表文に仏教用語が使われているから、すでに仏教がこの地に伝わっていたことが示される。

4、パレンバンの西北五料、タラントウオ (Talang Tuwo) 出土の刻文で六八四年に相当する記録あり、「シュリークーシエートラという放生園を設け、王の他の子等と共に一切有情の利益に供えん……。」これは明らかに大乘仏教の思想である故、当時大乘仏教が入っていることを示している。

5、義浄がこれと同じ年六八三年にシュリヴィジャヤに来ていたが（義浄は六七一〜二、六八五〜七、六八九〜九二

三回滞留）

「南海諸州には十数国あり、純ら根本有部なり。正量は時に欽ばる。近日已來、少しく余のことを兼ね、小州ありて……斯れ乃ち咸仏法を遊び、多くはこれ小乗なり、末羅遊に少し大乘あるのみ」と言っているのに比して大乘も現存していたことが分る。特に大乘が大きな力をもってくるのは

6、密教の継承者不空三藏が師金剛智三藏に七一八年にここで会い、密教の勉強をして支那に伝えたことから分る。
7、又大乗としてリゴオ[*Li-go*]刻文——マレー半島のバンドン湾の近くに一大寺院がありその彫文の七七五年に当るシャカ紀元あり、それに梵語の偈「三つの塔を建てる」とある。

8、中部ジャワ、カラサン碑文サカ紀元七〇〇年（後七七八年）に当る梵文一二ヶ、出土、即ちサイレントラ王朝に属するマハラージャ、パンチバナ、ナムカラナ、ターラ女神に寺院を奉納す、これは明らかに大乘である。

9、ケルラク (*Keturak*) 出土、サカ紀元七〇四 (AD 七四二年) 「サイレントラ王統、グラニーンドラ王、クマールゴージャという師僧のために文珠像を造立した。

10、前出ナーランダ刻文、仏教が盛んであったが故にインドに勉学の学生のために精舎を作る必要にせまられた。又ライデン大板金の如く、南インドのネガバタムにも精舎を作ったのもこれと同じ意図であった。

11、パレンバンから遠からぬ *Kömering* 河から立派な釈迦、観音菩薩の像、又弥勒菩薩の像、これらは中央ジャバのもの（八〜十世紀）

12、ブリット、セリントククの丘から花冠をつけた釈迦像が出土している。これはスマトラ独自の仏教のスマトラ化が進んでいたことを示している。即ちこれはジャバのサイレントラ王朝崩壊後ひとりさかえたシュリヴィジャヤ王朝の仏教からいって興味あることである。

13、マデイリングのシマナガムバットの練瓦作りの遺跡で浮彫りのある数ケの石、カーラ (Kala) の頭部は八、九世紀の中央ジャバ様式、又パレンバン西方のラマタンク (Lamtang) 河附近で中央ジャバ時代のシバの彫刻出土、

14、パタン (Padang Lawas) 州 S (Gunug Tuwa) 地方 S Batak でシヤカ紀元九四六年 (AD 一〇二四年) の日付である青銅の群像が一ツ発見、「両側に Taisa を従えた四本の腕の觀音、これは世間天神 (Lokanātha) を形どったもの、それに Srigga という作者の名前と古いマライ語で書いた大乘的な回向文が発見された。これは全体の様式と碑文はジャバ的であるが、スマトラで作られたことに間違いない。それは十一世紀頃、かかれたネパール人の手記で、当時スマトラでローカナータが崇拜されていたことが記されているからである。

15、パダンハリ州のパダンハリ河の左岸 (Sungai Langsat) 附近で発見されたケルタナガラ王の不空羂索菩薩像、その台座にジャワで用いたカワイ文字とマヒ語の綴が記されて居り、

「シヤカ紀元一二〇八 (後一二八六年) にケルタナガラ王が四人の僧侶に命じて、不空羂索觀音の像を王子ヴィスバルーバ (Visvarūpa) の賜物としてジャワからスマトラに將來し、パダンハリ……に建立せしめた」との勅願文が出土した。

以上見ると最初は後述のメンドウツツの如くグプタ様式、更にナーランダやパーラ仏等が変った南インド的であった。然しシュリヴィジャヤよりジャワの方が力をもって来るとジャワ化が進んだことはその出土の仏から分る。然し更にアンコールワットまで、その勢力下に治めその影響下に成立させたサイレンドラ王朝も九世紀初頭マタラムのバリトウラ王の為に駆逐されシュリヴィジャヤを主都とするスマトラだけの王朝になり、更に貿易に支えられて、猶数百年隆盛を保つとこのジャバ様式から段々スマトラ化が進んで行くのは当然である。これは上記の資料からうかが

われることである。

然して、そのシュリヴィジャヤの仏教の隆盛を示すものとして

趙汝适の「諸蕃誌」(AD一二二五)に「三仏齊は真臘(カンボジャ)と闍婆の間にあり十五州を管し、泉州の正南にあり……仏あり、金銀山と名付く、仏像は金を以て鑄し、国王立つ毎に先づ金型を鑄して以て軀に代う。金を用いて器皿と爲す、仏に供するに甚だ厳なり、その金像器皿は各々誌を鏤みて、後人に毀つこと勿きを示す。困人のもし病劇しきものあらば銀をもって、その身の重さの如くし、国の窮乏に施すもの亦、死を緩むべし」と仏教の盛んなことを示している。この仏教の盛んなさまも、このシュリヴィジャヤの衰滅と共にほろびて了つた。然し特筆すべきはこのサイレントラ王朝の勢力下にもう一つの重大な遺跡がある。勿論これがポロブドゥールであることは論をまたない。このポロブドゥールの遺跡の分容を考えると、この時代の仏教の如何なるものであるかが分ろう。



ジャワ中部南海ジョクジャカルタ郊外、メピラの活火山の麓に西紀七百年代、約百年近く続いて建てられた大遺跡が英総督ラッフル卿によって発見された。椰子の茂る平原からぬき出た小高い丘の上に黒い安山岩を積み上げた、一辺百十米余の方形植を五段に積み上げ、その上に円形植を三段、全体をピラミッド状に積み上げ、その三段の円植上には七十二の籠目のように中にみえる珍しいストゥーバがあり、その中には仏像が外から見られる。最高植の中央には大きな鐘形をした大ストゥーバが作られている。然しその後、この石積みの重圧にたえかねたか、その崩壊から防ぐために、基植の外に相当量の石積みの植が作られている。

まず東門の入口に立つ時、第一植の外側や第二植の外側その他に仏菩薩像が多く彫り込まれている。第二回廊の

はると東門から右まわりにまわって、一まわり大方広莊嚴経が彫られている。これは大乘の立場からの仏伝で、実に丹念に経文の順序そのままに彫られ、その下部は釈尊の前世物語、即ちチャータカが、これはここだけに止らず、対応壁、第三回廊対応壁にも彫られている。然して第三回廊主壁、第四回廊主壁及対応壁、第五回廊の対応壁には華嚴経の入法界品即ち普財童子が五十三人を尋ねて法を求め、そのさまを大体経文の順を追って彫りこまれている。更に、この第五回廊の主壁面は華嚴経入法界品の結末の普賢行願讃の普賢の徳をこまかに表わし、その徳をたたえている。然して、今は崩壊除けの土止め役の石積みの下になって、ほんの一部を残して壁画はうめられているが、ここに普因普果、悪因悪果の地獄極楽の彫りもの、即ち「分別普惡報応経」が彫りこまれている。

これは要するに基壇に彫られた普因普果、悪因悪果の物語によって、人の世の生のいとなみと、その業の強さ恐しさを痛感したポロブドゥールの信者は、はるかに高く仰ぐ菩薩の崇高な世界をおがみ、渴仰の心をおこす、そして東門から上って第二回廊に天上界の菩薩が慈悲のために、やがて地上に降下して釈尊となり、いろいろの修業を重ねて、遂に悟りに至る、そして法輪を転じ人々の苦を除かんとする。その方広莊嚴経の仏伝に目を輝かせ、第二周目に下部の彫刻と、そして第三周目に対応壁のそれに釈尊となる前世の種々の善根功徳に自らの修業のきびしさを悟り、或は王となり、或は動物となった時の善根が仏の悟りという結果を生むことを種々の因縁譬喩によって味わい、悟りへの契機となるを知る。それから、この鹿野園の転法輪に続くものとして、仏が祇園精舎で文殊、普賢以下五百の菩薩に説法する場から、華嚴経の入法界品の第三回廊主壁の物語がはじまる。そして人々は普財童子と共に、同じ身となって普知識を求めて求道の旅を続ける。この階を対応壁とも二巡して、又第四回廊をも二巡して、最後に弥勒、文殊、普賢に法を求めて究極の境地に入り、第五回廊で普賢の徳をたたえる普賢行願讃を最後に悟りの道のひらかれた

ことを讃歎する。そして干潟博士のいう「三層の円壇に見聞生、解行生、証人生の三生成仏を体现して、中央塔に至るように設計されている。そして、中央の塔は自性法身、円壇上の三層は自受用法身、第五層は他受用法身、第四層以下は變化法身、基壇は等流法身、これらは向上修証面のみでなく、本覚向下面を表わしている。」即ち、基壇から一步一步自らを向上させると共に、法身自体が自らを転回させ、最底の所まで応身して、その境涯におり立ち、それと共になやみ、手をとり合つて救い出す。上求菩薩即下化衆生、往相即還相の普賢行、仏教の究極をこれ自体示している。これは最上壇の仏が降魔成道の仏で、次の三円壇上の七十二の仏が転法輪の仏なるが故に、単に向上面のみでなく悟つた仏が逆に降下説法して行くさまを示していると言えよう。更に仏龕中の仏は夫々が方向によって印相を異にし、東方宝幢如来、阿閼如来、南方宝生如来、西方阿弥陀如来、北方不空成就如来、東南隔普賢菩薩、西南隔文殊菩薩、西北隔觀音菩薩、東北隅弥勒菩薩で先述の三段の円壇上の七十二仏は転法輪仏、最頂の大覆蓋の中に降魔成道の釈迦仏を中心とする大曼荼羅、仏教の仏身觀、世界觀を如実に現わした史上最大の仏跡であった。そして大乘仏教の精華を燦としてここに現わしている。然もこのポロブドゥールは単一なものでなく、メンドウツツのグブタの伝統をもつ立派な阿弥陀、觀音、勢至の弥陀三尊と、パウンの守護神堂を合せたより高度なものであった。これらを考え合せるとサイレンドラ王朝期の仏教が如何に高度なものであり、大乘の精華を如実に示しているといえよう。かくて法顯期の小乗からすぐ大乘へ、特に南インドからの華嚴更には密教へとその勢はナールランダをしのぐものであった。

然しこの仏教も、やがて、仏教、ヒンズー教が流入したその同じコースを通過して、同じように流入した回教によって遂に無に帰すのである。十四、五世紀以来の回教の破壊は物凄くあらゆるものを破壊し去った。然しこのポロブド

ウールのみ奥地であった為か、ねむりつづけて、今日に当時のさまを我々に示しているのはせめてものなぐさめである。

このように、シュリヴィジャヤを中心としたスマトラ、ジャワのインドと支那との交渉の歩みとそして仏教の遺物を求めて来たが、結局通商のある時期だけ仏教が栄え、先述の周去非の嶺外代答卷二からみても三仏斉のシュリヴィジャヤがおとろえはじめ、明法卷三二四で示されるように、これが滅亡し、他国と交渉をもたなくなると仏教は又滅亡することがこれらの資料からうかがわれるのである。普遍を求めて成立した仏教が普遍を求める商人によってはこばれ栄え、その経済的消長と共に消えゆくは今まで私のインドからみてきた事実である。然らば何故であらうか。



仏教の基盤はインド以来商人であることは度々のへてきた。一方民衆はヒンズー教徒である。これはマックス、ウエーバーのいう宗教の二元性、即ちインドでは社会の上部は仏教、下部ヒンズー、支那では上部は仏教、下部儒教、日本では上部仏教、下部神道等の二元性に仏教の位置特性が示されている。それ故に仏教は文化、哲学とか彫刻芸術には絢爛たる華をさかせたが、インテリの弱さ、中産階級の流動性のために一瞬にふきとんで了う弱さを内蔵していた。これはジャバでも例外ではない。即ち、このポロブドゥールとはさほど遠くない、ジョクジャカルタ郊外二十哩にブランパンという荘大なヒンズーの寺院がそれである。

これは九世紀に仏教に対抗して、デイエン高原の文化以来サイレントラ王朝時代に沈黙していた民衆の宗教であるヒンズー教がポロブドゥール建設直後にここに復興されるのである。

そもそもサイレントラ王朝がほろびる一つの原因は民衆が、この仏教寺院を作る重臣に反抗したことがあげられる

が、恰もインドに回教侵入の中で依然これにたえながらヒンズーの信仰を失わなかったインド民衆のたくまじさに比すべきものがある。このヒンズーのたくまじさは仏教にはない。回教来らば逃げ去り行く融通性が、又仏教の本質的に内在する弱さなのかも知れない。かの中共軍のチベット侵入に、まっさきに逃げ出したのは商人、地主、仏教僧であつたことから言えよう、商人によって栄え、支えられた仏教は又、その基盤の崩壊によって無となるのである。

これは又仏教の信仰、教儀の融通性にも言いうることである。インドで八世紀頃から出はじめた密教、特に十一、二世紀の仏教最後のあがきとも言い得るパーラ仏教は、ほとんどヒンズー化していた事実。又ジャワでケルラクの彫文に「西紀七八二年に当る年に、サイレンドラ王朝のタラニンンド王によって支配され、クマラゴージャという師僧によって文殊師利菩薩を作る。この文殊師利菩薩は印度教の三位一体の神々との一致、仏教とシバ教との融合を示し、仏陀とシバが最高実在の異なる表現として同一神殿に祀られる。」ことを記していることからして、仏教は最早八世紀ポロブドウールの仏教全盛時代とその裏で最早ヒンズー教と融合する教儀を生み出している。だからこそその融合の度合を深め千三百年代には融合・混合の極をきわめ、それがかえってヒンズーの中にとり入れられて行く原因となる。そして一四四七〜五一マジパイト王朝がみだれ、これにイスラムの侵入侵略が続くと仏教は無に帰し、一方ヒンズーはバリーにのがれて現代にまでその生命を長らえている。否ジャワ本土でも表面は回教というものの、その底にはヒンズー的生活、文化が依然として支配していることは特筆されてよい。ここに仏教の本質と宿命をもう一度考うべき時が来ている。歴史を鑑として。

△資料▽

ポロブドール刊行会 閻婆仏跡ポロブドール

法顯 法顯伝(仏国記)

大正、大藏経

義浄 南海寄帰内法伝

全 大唐西域求法高僧伝

// //

南伝大藏経 小部經典。華嚴経。大方広莊嚴経。

宇野円空 スマトラの仏教遺跡(仏教学の諸問題)

木村日記 爪哇スマトラのサイレントラ王朝とその仏教(海外仏教事情七の四)

仏教芸術58 特集東南アジアの美術

東インド仏教文化 台湾総督府外事部

CHAU JU-KUA 趙汝适諸蕃志の英訳

佐和隆研 密教の美術その他

アンドレフォーシエ 仏教美術の研究

クマラスワミ インド及び東南アジアの美術史

山本智教 ポロブドール(英文)

千瀉博士 仏跡ポロブドール

千原大五郎 インド南海の仏教美術

高田修 海のシルクロードを求めて

三杉隆敏 インド文化圏

世界歴史シリーズ 仏像の形式及礼拝像の形式

逸見梅栄

その他多数